

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12393

研究課題名（和文）日本語とりたて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味

研究課題名（英文）Syntactic and Semantic Analysis of Negative Concord Phenomenon Based on Stacking of Focus Particles in Japanese

研究代表者

井戸 美里 (Ido, Misato)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・特任助教

研究者番号：20802606

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「なんか...ない」のような日本語のとりたて詞における否定呼応現象の統語構造と意味を明らかにすることを目的とする。本研究では、否定呼応現象を起こすとりたて詞の現象記述を進めた。その中で、とりたて詞の一部の否定呼応現象は、文脈および認識主体の信念と、とりたて詞が用いられた当該文が一定の関係にあるときに用いられるのであり、否定との呼応は表面的な傾向にすぎないことを示し、これらの現象における文脈レベルでの現象観察の必要性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの否定呼応現象は、単一文レベルの分析が中心であった。一方本研究の成果は、日本語のとりたて詞の否定呼応現象は単一文レベルで分析ではなく、より広範な要素の現象記述を必要とする文脈レベルでの分析が不可欠であることを示している。さらに、「なんか」などが用いられた文から感じられる話者の否定的評価の意味は、「前提」などの従来の意味分析概念では捉えることができず、これらの概念の再構築や別の意味概念の必要性を示している。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate the syntactic and semantic structures of the negative concord phenomenon involving Japanese focus particles like "nanka ...NEG". In this research, I have advanced the descriptive analysis of the phenomenon where focus particles induce negative concord. Among these, some instances of negative concord with focus particles occur when there exists a certain relationship between the beliefs of the speaker and the context in which the focusing particle is employed within the sentence. This demonstrates that the co-occurrence with negative predicates in this phenomenon is merely a superficial tendency and emphasizes the necessity of observing these phenomena at the discourse level.

研究分野：言語学

キーワード：現代日本語 否定極性 とりたて詞 統語論 意味論

## 1. 研究開始当初の背景

「は」「も」「など」「くらい」など、文に付加的な情報を付け足す役割を果たしている語群は、「とりたて詞」「とりたて助詞」と呼ばれ、80年代以降とりわけ日本語学の分野に多くの研究の蓄積がある。他の言語においてもこれらに対応する語群は存在するが、日本語はとりたて詞が顕著に発達しており、近年では他言語では日本語ほどとりたて表現が表す意味が多様ではないことが指摘された。つまり、日本語のとりたて詞は、他言語では形態を持たない要素が顕在化している、言語学的な分析に好適な研究対象であると言える。

代表者はこれまで、とりたて詞のさまざまな意味的・統語的特徴を明らかにし、特にとりたて詞には体系的に否定辞と呼応関係にあるものが存在していることを指摘してきた。また、その中でも、ある2種類のとりたて詞が否定呼応現象の重要な役割を果たしていることも明らかにした。その2種類のとりたて詞とは、「(対比の)は」と「も」である。とりたて詞は、(1)(2)のように、「など・は」「くらい・も」など、複数のものを組み合わせて用いることができるが、その中でも、「は」や「も」が後接する現象が、否定呼応現象のきっかけになっているのである。

(1) 子どもの喧嘩ごときで、警察 {などは／までは} 学校にやってくる／\*来た。

(2) 花子は、雑巾がけ {さえも／くらいも} できない／\*できる。

加えて、申請者は、これらの「は後接タイプ」と「も後接タイプ」の否定呼応現象は、統語的・意味的特徴が異なることを報告しており、このことは、ひとくちに「否定との呼応」といっても、両者の違いこそが言語現象の統語・意味を捉える上で重要なものであることを示している。否定を要求する言語表現自体は、通言語的に見られる一般的なものであるが、それをこのように形態によってよりシンプルな要素に分解する分析は、英語の any など1形態素で否定辞を要求するような構成になっている言語では不可能だったものであり、日本語のとりたて詞を用いて否定呼応現象を分析することの有効性を端的に表している。

組み合わせ方によって、様々な統語的・意味的特徴の変化を見せるとりたて詞を分析することは、語と語がどのようにして組み合わせられ、その結果どのような音の連なりと意味を生み出すのかという、構成的アプローチには最適の研究対象である。そのため本研究では、この理論言語学的に示唆に富む現象が、どのような新しい言語一般化を生み出すのかについて分析していくことを試みた。

## 2. 研究の目的

本研究は、「…など・は～ない」「…くらい・も～ない」などの「とりたて詞」と呼ばれる語群の組み合わせが否定と呼応する現象を対象に、否定呼応現象とは、どのような意味を持つ語を、どう組み合わせたときに起こるものなのか、その統語と意味のメカニズムを明らかにすることを目的としたものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の3つの観点から研究を行った。

[1] とりたて詞の否定呼応現象についての基本的な記述を進める。

[2] [1]で得た知見をもとにその現象がこれまでの理論的枠組みにどのように位置づけられるのか（または位置付けられないのか）を分析する。

[3] とりたて詞以外の否定呼応現象への応用可能性を探る。

## 4. 研究成果

現象記述および分析を進める中で、特に「は後接タイプ」の記述が先行研究に少ないこと、また、「も後接タイプ」にとつての否定辞は形態的に必須のものであるのに対し、「は後接タイプ」はそうではなく、否定的意味を表すさまざまな述部と共起しうることから、「は後接タイプ」の方がより特異な現象であると考え、こちらを優先して分析を進めた。その結果、以下の成果が得られた。

[1] とりたて詞「は」が否定とともに用いられて部分否定を表す現象（(例)「全部は食べなかった」）について、先行研究では、否定辞との共起を前提として、部分否定の「は」は、必ず否定のスコープの内側に入るという分析がなされていた。しかし本研究では、は」が部分否定を表す現象は、共起する述語が「非到達」を表すものであることが重要であることを指摘し、否定辞は必ずしも必須ではないこと、そのため、先行研究の否定ととりたて詞のスコープ関係によるアプローチが妥当ではないことを示した。「非到達」がどのように定義されるのかについての問題は残るものの、この現象が「は」句と否定辞という節内の要素同士の関係というローカルな関係

によって分析できるものではないことを指摘した点で、この現象の指摘は重要である。

さらに、とりたて詞の否定呼応現象について見過ごされていた重要な現象を指摘し、記述的にまとめて単著書籍としてまとめ報告した。これは主に、「など(は)」「なんか(は)」などの話者の否定的評価を表すとりたて詞と呼ばれる語群を対象とした。これらのとりたて詞の否定呼応現象もまた、述部の否定辞は必須ではない点が記述的指摘として重要である。さらに、否定呼応を起こしたときの否定辞の意味的な特徴として、否定が話者の判断にかかわるモダリティとしての特徴を持つことを指摘した。また、これらのとりたて詞については、「話者の否定的評価」とはどのようなものなのか、具体的な内容は指摘されてこなかったが、本研究では、評価を表すとりたて詞は「話者の適切性に関する信念と談話で導入された命題が矛盾している」という場合に用いられる談話マーカであることを、現象記述をとおして指摘し、そのため、述部が否定に偏ることは、表面的な傾向にすぎないことを指摘した。さらに、話者の否定的評価を表すとりたて詞の否定呼応が否定辞を必要としない現象について、これらの現象を単一文レベルの記述ではなく、談話レベルで記述することでその一般的な特徴を捉えることができることを報告した。さらにこれらの成果に基づき、とりたて詞の呼応現象について、先行研究のアプローチが形式的、意味的なものに偏っていることを指摘し、より広範な現象観察を必要とする、談話的な観点が重要であることを示すワークショップを開催した。

[2] [1]の否定辞を必須としないとりたて詞の“否定”呼応現象の形式的分析を進めた。[1]によって、とりたて詞の否定呼応現象が、実は厳密には否定辞を要求せず、より談話的・文脈的な条件に依存して何らかの述部制約が起きていることが明らかになったため、先行研究の談話を形式的に扱うアプローチを取り入れることを試みたが、先行研究の批判的検討までは至ったものの、具体的な形式化を提案するところまでは至らなかった。今後これらの現象を形式的に分析するためには、話者の信念や文脈を扱う先行研究の枠組みを見直すという根本的な取り組みから始める必要があることが明らかになった。

さらに、否定呼応を起こすとりたて詞として代表的であり、かつ記述的蓄積が比較的多い「しか」と、類似した意味を表す「だけ」の形式的分析を行った。「限定」という含みの意味がどのように派生するかについて、先行研究の「前提」を用いた分析とは異なった maximality を用いた分析が、両者の違いをよりうまく捉えられることを示した。

[3] とりたて詞以外の否定呼応現象を起こす要素の記述と分析を進めた。特に、副詞「あまり」「そんなに」と、否定呼応表現「かけらも」について取り扱った。

「あまり」「そんなに」の分析をとおして、否定呼応が意味的・談話的な動機から起こる場合と、統語的な動機から起こる場合があることを示した。前者には、「そんなに」が、後者には「あまり」が該当する。その中でも前者の副詞は、前述のとりたて詞の否定呼応ととても似た振る舞いを見せることが明らかになった。

「かけらも」については、認識主体（典型的には話者）の評価に関わる否定呼応現象「NPのかけらも…ない」について、認識主体の評価の意味がどのように立ち現れるかに関する仮説を提案し、学会で報告した。

本研究の成果を総合すると、記述的には、特に「は」後接タイプと呼んだもので否定呼応を起こす現象の一部には、話者の信念や文脈が深く関わっていることを指摘し、単一文レベルではなくより広範な現象観察が必要となる談話レベルの分析の必要性を示し、理論的には、これらの否定呼応現象の分析には、必要な理論的道具立ての見直しから必要であることを示したといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ido, Misato and Yusuke Kubota	4. 巻 160
2. 論文標題 The hidden side of exclusive focus particles: An analysis of dake and sika in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Gengo Kenkyu	6. 最初と最後の頁 183-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.160.0_183	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井戸美里	4. 巻 2
2. 論文標題 NPCMJコーパスをとおしてみる特定の統語環境における語彙の偏り	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 227, 240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井戸美里	4. 巻 15
2. 論文標題 「は」の後接から見るとりたて詞の否定呼応現象	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00001595	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Misato Ido
2. 発表標題 Semantic Properties of the Japanese Emphatic Minimizer 'NP-no-kakera' Based on the Modal Base
3. 学会等名 Logic and Engineering of Natural Language Semantics 19 (LENLS19) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Misato Ido, Ai Kubota, Yusuke Kubota
2. 発表標題 Two types of attenuation strategies for polarity-sensitive items: The semantics of degree adverbs amari and sonnani in Japanese
3. 学会等名 Data-oriented approaches to meaning in Korean and Japanese (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 評価的なとりたて助詞ナンカにおける談話的制約と統語的制約
3. 学会等名 日本語文法学会第22回大会 パネルセッション「とりたて助詞における評価的態度の再検討」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 いわゆる「部分否定」の八の意味構造と統語構造
3. 学会等名 日本語文法学会第22回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 評価を表すとりたて詞が現れたときの否定文の特徴
3. 学会等名 第163回関東日本語談話会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 NPCMJコーパスによる名詞述語文の名詞修飾節に現れる副詞の研究
3. 学会等名 国立国語研究所プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」共同研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 NPCMJコーパスをとおしてみる特定の統語環境における語彙の偏り
3. 学会等名 関西言語学会第44回大会シンポジウム「高度文法情報付きコーパスとその日本語研究への応用」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ido, Misato
2. 発表標題 The distribution and meaning of the Japanese evaluative particle nanka
3. 学会等名 Workshop on modality and related matters
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 IDO, Misato
2. 発表標題 The meanings of dake and shika based on their maximality and polarity
3. 学会等名 Japanese/Korean Linguistics conference 26 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 日本語のとりたて表現と否定呼応
3. 学会等名 国立国語研究所プロジェクト第3回合同研究発表会 Prosody & Grammar Festa 3
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 否定極性表現「そんなに」「あまり」の分布と意味
3. 学会等名 ワークショップ: 極性表現の構造・意味・機能
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 井戸美里	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究	

1. 著者名 井戸美里	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 「「[名詞句]なんて～ない」におけるモダリティとしての否定述部」竹沢 幸一, 本間 伸輔, 田川 拓海, 石田 尊, 松岡 幹就, 島田 雅晴(編)『日本語統語論研究の広がり』	

1. 著者名 井戸美里	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 400
3. 書名 「「そんなに」「あまり」の非否定節における分布と意味」岸本秀樹, 今仁生美, 澤田治(編) 『極性表現の形式・意味・機能』	

1. 著者名 井戸美里	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 319
3. 書名 「日本語のとりたて表現と言語類型論」窪園晴夫, 野田尚史, ブラシャント・パルデシ, 松本曜(編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』	

1. 著者名 Misato Ido, Ai Kubota, Yusuke Kubota	4. 発行年 2023年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 472
3. 書名 "Chapter 12 Two types of attenuation strategies for polarity-sensitive items: The semantics of degree adverbs amari and sonnani in Japanese" Kishimoto, H., Sawada, O., & Imani, I. (Eds.). Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons Between Japanese and Other Languages.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<a href="https://researchmap.jp/misato59/">https://researchmap.jp/misato59/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------